

洛友会会報

京都市左区吉田本町
京都大学工学部
電気工学科教室内
洛友会

私のゴルフ談義

―下手の横好き―

大阪大学教授 喜田村善一 (昭9卒)



去る10月20日前田憲一先生退官記念会の打合せのあと、前田さん(昭7)を囲んで池上さん、伊藤さん、近藤(文)さん(いずれも昭18)木村(登)さん(昭30)方との酒の席で、話題の乏しい私はうっかりゴルフの自慢話をした。一昨日の結婚35年記念日にプライベートコンペで優勝したとか、これまで日本全国のゴルフ場のうち183コースをまわった等々。早速前田さんからそれは面白い、是非洛友会報に載せようと巧みにおだてられ、気の弱い私は結局引受けざるを得な

い破目におちいった。正に「ゴルフをやらない人のいる集りでゴルフの話はするべからず」という基本的なエチケットに反した報いである。洛友会報は毎号格調の高い寄稿が多いが、たまには肩のこらない話もいいのではないか、現に私も阪大工学部の同窓会誌でも見るのは巻末にある友人のゴルフのスコアだけという人も多いようなので自分を納得させて筆をとる次第である。もつともゴルフの話を書くにしても洛友会員の中心は私よりはるかに適任者が多いことは十分承知している。私の知る狭い範囲でもゴルフクラブの理事長である今田さん(大12)、非常に愉快なゴルフア岐美さん(大13)、ハンディシングルの鈴木さん(昭6)、ゴルフ場の経営や建設に参画された浅田工博(昭7)等々錚

々たる先輩がおられるが、はじめに権威者の本格的な話が出るとあとか書きにくいのであえてトップをうけたまわることにした。私がクラブをはじめて握ったのは昭35年2月2日徳島大のグラウンドで仁田さん(昭9)に無理矢理に教えこまれた時である。以来すっかり病みつきになってしまった。彼にはアルコルやスキーの手ほどきしてもらい、この方は藍より青しになったが、ゴルフの方は10年この方一向に上達しない。人に教えてもらったり、本を読んだり、練習をするのがきらいな性格で、全く自己流に遊んでいるのが大きな原因であろう。一緒にプレイする人に先生は中々お好きですとか、君は足が速者だねとか、精々バットはいいですとかいわれるが、これらは裏返せばすべて腕の方はお世辞にも上手とはいえないということである。確かにタフであることは自他ともに認めざるをえない。盛夏に五日間連続各地に転戦したことも一再にとどまらず、一日46ホールまわったこともある。暴風雨の中一ラウンドプレイもしたがこの時はパートナーと二人でゴルフ場を借切った形である。

これだけ熱心なわりにスコアははじめた時と変わらないので一体君はうまくならうとする気があるのかと聞かれるが、これでも自分なりに努力はしているつもりである。ただゴルフと酒は両立しないのではなからうか。今田さんが主宰しておられるサイエンス会なるゴルフの集りがあり、この会で「ゴルフとは」という題で短文を募集されたことがある。その時私の研究室の助教は「ゴルフとは湯上りのビールをうまくする準備運動」という警句をはいしたが、私は終るまで待ちきれず途中でもガブガブのむのがいけないのかも知れない。

大体私の打球は上に飛ばず地をほうように転ぶので、よく二次元ゴルフとか明治の飛行機だとの評がある。だから谷越し、池越えやバンカーは本当に苦手である。一昨日徳島カントリークラブにいった時原田さん(昭14)からここはいいコースでしょうといわれ、確かにバンカーさえ無ければねとこたえたことである。しかし一度だけ君のフォームは大変参考になるといわれ、これでも見どころがあるのかといささか気をよくしかけたところあとがいけない、君の打ち方は教科書に書いてあるのと全部逆だからねといわれがっくりしたこともある。

そんな具合でこれまで賞といえは洛友会に相当する阪大の澤電会のコンペで七里シヤ杯を手にしたこと、ただしこの時は参加者は七里さん(大5)を加え計三人だけであった、また電々洛友会では君はうまくはないが百里を遠しとせず毎回上京出席するからと長島さん(大3)とともに精勤賞をもらったこと位である。悪い方の例は枚挙に遑がないがブービー賞やメーカーは常連であるし、昨年も快晴の宝塚のコンペでOBも出さずバンカーにも入れずに一ホールで19たいた。この時は同じ組の幸前さん(大12)、永田さん(昭7)が見るに見かねて内緒で空振りにはノーカウントにしていたのだがそれでもハーフ75という始末、大体トリプルボギーペースが標準でいわゆる愛されるゴルフであった。

ところが昨年末還暦をむかえ、赤いちゃんちゃんこやずきんならぬ、頭のとっぺんから足の先まで赤いゴルフウェア一揃いをおくられ、気分的に若返ったせいか今年になって少し異変がおこった。8月15日には太閤垣東山の狭い短いコースながら46・45でまわり、地主のAさん(昭6御本人の名誉のため特に名を秘す)からチョコレート10枚頂戴するという申し訳ない結果である。この時は特にバットが好調でハーフ10というプロ顔負けの記録を出した。10月中に三回優勝したが、31日の阪大工学部の

コンペでは西村さん(昭16・12)と同ネットながら年長の故をもつて辛うじて優勝し、大勢の前ではじめてカップを手中にした時の喜びは流石に一入であった。この7日には私が会長をしている関西E P G C (大学電気系教授のゴルフ会)のコンペがありコンディションは上乘であったが、この会の歴代会長故熊谷さん(昭2)、笠原さん(昭7)、前田さんに習い私は優勝を遠慮した次第である。今なお斐然としてプレイされる七里さんのお年になるまであと20年近く、その内に一度洛友会のコンペでも優勝し、先輩寄贈の榮譽あるカップを頂戴したいものと思っている。

ゴルフをやる効用とか楽しみはいろいろあろう。きれいな空気の中、広々したところでクラブを揮い芝生の上を歩くのは健康的そのものであり、気分転換にも大いに役立つことであろう。しかし私は一人で、または全く無縁の人とコースをまわる気はしない。平素から親しい人達または初対面でも同窓生なり仕事の上で何らかのつながりをもつ人なりと気のおけない話をしながらプレイすることに無上の喜びを感じ、ゴルフのお蔭で多数の知己をえたことに感謝している。どうも一人よがりの話で貴重な

誌面を汚し恐縮である。ゴルフをやられない会員には全然興味がないうことであり、やられる会員にもこんな横好きもいるのかと気休めされるのがおちと思うが、今後は

拍手で観る名月 (中部支部秋季例会記)

併せて七日島の紹介

名城大学教授 古田 久一 (昭6卒)

中部支部秋の例会は伊勢志摩五カ所湾内にある七日島での観月でした。十月二十一日(土)でしたので仲秋の名月としては一カ月おくれということになります。京都嵯峨の大覚寺のほとり大沢池の観月は今でもつづけられていて、仲秋の名月には昔の風流を偲ぶ催しもあって随分賑うと聞いています。が、観月そのものを楽しむには七日島にすぎるところはないと思えました。京都からわざわざこの観月に参加していただいた大谷泰之先生もこの雰囲気をお極めて賞讃され、ぜひ洛友会々報で紹介するようにと奨められましたので、私の拙文ではとてもその実感は表現できそうにもないことは知りつつも約束を果すことにしました。なお中部支部会員には遠隔の距離感にしりごみされたのか、わずかに二十名にとどまったことを惜しみます。

ためになるゴルフ談義なり、池上さんのボーリング優勝記など掲載されることを期待して筆を擱く。(昭47・11・13福岡にて記す)

参加者は次の通りでした。大谷泰之先生(昭13)、本多静雄(大13)、庄野誠一(大12)、河津吉兵衛(大13)、田中卓次(大15)、古田久一(昭6)、川村進(昭12)、秋田清四郎(昭16)、小沢勝(昭19)、伊藤定昌(昭20)、西尾又一(昭23)、石川進(昭26)、遠藤茂(昭27)、前原恒之(昭28)、倉野昌夫(昭29)、増田宗敏(昭38)、松本幸男(昭41)、白井晋(昭41)、木村安秀(昭41)、林靖人(昭42)、村上誠(昭43)、片岡正夫(昭44)さて、この文を読まれる方にはまず七日島の全貌を頭に描いていただきたいと思いたすので、そのあらましを説明いたします。七日島は五カ所湾内にある広さ約十萬坪のこもりした緑の島で中部支部長本多静雄氏が会長をつとめる日本電話施設KKの所有となっております。本多会長はこの島を会社社員の修養道場とする計画を立て、

その宿泊のための恰好の建家として島の中腹の谷間に「谷の家」をまた中腹よりやや上寄りて展望のきく傾斜に「山の家」を建てられたのです。そしてこれらを基点として島内散策のための小径が四方のびていきます。本多会長のご説明によると、越前の山間僻地で移住のため空家となっていたものを買い求めてここに移築したものだそうです。いづれも二十坪余りと思われる小さいものですが、疎野な萱葺きの大屋根がこの島にもび

たり調和する落ちついた風情をかもし出しています。その厚くて深い庇の下の入口を入ると土間につづいて広い板敷の広部屋と畳敷の小部屋が並ぶといった間取りで、柱も板戸も梁もすすけて小暗いですが、太い柱に太い梁がわたされている天井は高くて広くのびのびとした感じを与えてくれます。生れが雪の深い山間僻地であるので、大雪の重みに耐えるよう堅牢につくられていたのだという本多会長のご説明を聞いてなるほどと思いました。こうした風情豊かな七日島をとりまく水面には真珠貝の殻が緋の紋様を描いて美しく浮び、この水面を距てて高からず低からずの魅力的な丘陵が五カ所湾をとり囲んでいます。「山の家」はこの美しい風光を享受するに恰好の位置に

建てられていて、観月の会はこの「山の家」で催されたのです。秋の日は短かく、五時過ぎには早くも薄暮風景になろうとしていました。その頃私共は「谷の家」で例会を開催していました。本多支部長の挨拶、大谷先生の母校の近況報告、幹事の事業報告、これにつづいて出席会員の自己紹介が終るといよいよ待望の観月の宴となる次第ですので、一同は「山の家」へと移るようになりました。

「山の家」では庇に電灯入りの提灯がたくさん吊り下げられていて明るく、家のぬれ縁につづいて棧敷までつくられていて、そこではすでに観月に招かれた他のグループの方々が盃を交わして賑やかでした。さてかんじんの月はどこぞと見渡せど見当りません。それもその筈、生憎の空模様で濃い雲が空一面に広がっていて、もしかすると雨にもなりかねない気配でがっかりしました。残念なことだがこうなれば宴会で大いに楽しもうと、庄野氏(大12)の音頭で乾杯をしたあとと出されている田舎料理をわれ先にとばかりパクつき初めました。芋、こんにゃく、椎茸、揚げ豆腐、鳥串、それに豆入りのお握りご飯など野趣充滿のご馳走を大いにパクつき大いに談じていると、折から流れる尺八の音色――

賑やかだった人声はピタリと止って島全体が静謐の仙境に一変しました。その静寂の中を尺八の音のみが島の木立の上を越えて薄暗い水面へと消えていくのです。その尺八の音色は時に朗々となり、時に蕭々となり名曲は島の霧囀気に調和してひとときわさえるのです。その一曲が終ると一斉に拍手。そしてまた尺八のひびきとともに再び静謐の仙境に一変するのです。さきほど京都大覚寺の大沢池での仲秋の名月について語られていた大谷先生もこの霧囀気には感慨一入の様に見受けられました。尺八の奏者は都山流大師範深井三山氏でした。

再び雲にかくれてしまいました。正に拍手で観る名月という表現がピッタリでした。龍頭の舟を浮べ大沢池の観月に比べるとスケールがはるかに大きく、王朝の昔を偲ぶ雅やかさはないが神秘的であり魅力的であり、かつ新鮮でモダンなこの観月こそは現代随一であるかと評して過言でないと思えました。

この尺八の演奏が終って暫らくした時でした。こんどは突然別の拍手が湧き上ったのです。まさかと諦めていた明月が濃い雲間からさっと現れたのです。その拍手が止み終らぬうちに月は再び濃い雲に遮ぎられる。拍手は消える。しかし間もなく雲間から月光が洩れ始めたと思うと間もなく明月が五カ所湾を再び明るく照らししました。再び拍手が湧き上りました。

拍手で楽しんだ観月もその後次第に空模様が悪くなり、帰りを急ぐ人々が順次引き揚げてしまっているのは洛友会のグループだけになっていました。宿舎は年寄り組に「山の家」を、若者組に「谷の家」があてられました。久しぶりの会合にこのあともしばらくは談笑がつづいて賑かでしたが、やがては森閑として神秘的にすら思える七日島となり、閑疎な山間生活の歴史を秘める萱葺の屋根の下で、すすけた板間の上に夜具をのべたとき、俗世界の雑念はすっかりなくなつてたちまち一同熟睡に入りました。

ふと湾内を見下すと真珠筏が輝く水面に墨絵の美しい緋模様を描き出していました。その筏の下には美しい真珠の玉が育ちつつあるのです。全く神秘的な景観でした。しかし、この景観も東の間で月は

「拍手で観た名月」の中部支部例会記はこの程度にとどめ、七日島の紹介を付記しましょう。七日島のある五カ所湾は行政的には志摩郡となりの度会郡に属しますので厳密には志摩とはいえないかも知れないのですが、近鉄伊勢線

の終点で、お馴染みの賢島が面する英虞湾のすぐ隣りの大きな湾で、伊勢志摩国立公園の区域に含まれています。まだ観光地としては未開であります。英虞湾に優るとも劣らぬ風光が最近になって漸く脚光を浴び初め、湾をとりかこむ丘陵がところどころ別荘地として分譲され初めたのです。このため大自然の魅力がここでも次第に破壊されそうになってきました。こうした中であつて七日島が考古美を探求し自然美保護に熱意を持つ本多静雄氏の手中にあることは五カ所湾にとって大きな救いであると思えます。

七日島へいくのに私共名古屋グループは近鉄宇治山田駅で京都から来られた大谷先生らと落ち合い、駅前からタクシーに乗りました。伊勢神宮(内宮)裏のトンネルを抜けて秘境五十鈴川の深い谷に沿って走ること約三〇分で急に視界が開けてきました。そこはすでに近鉄伊勢線いそべ駅の近くでここで道が二つに分れています。左寄りにいくと賢島、右寄りにいくと七日島で約二〇分で七日島の渡し場へ着きました。小さい渡し舟に乗ると真正面に七日島があります。「谷の家」は木立にかくれて見えませんが、こんもりとした緑の島のはほ中点を姿を見せる美しい萱葺の屋根——これが「山の家」で島全体をすばらしい画に引き立てていました。

約十分で島の棧橋につきました。そこには先着の本多氏ご夫妻が立っていてわれわれを迎えてくれました。上陸すると水際に沿った小径に案内され、これを少し登つて下りると茶席があるので、真珠作業場だったものを改装したものだそうですが、野趣な形ながらに俗味はなく、五カ所湾に浮ぶ真珠筏の緋模様を借景とする風情はまた格別でした。一同茶席の人となつたあと舟着き場に引きかえして、そこからくの字形の小径を約八〇米ほど登ると「谷の家」でした。そこから更にくの字形の小径を二〇米ほど登ると「山の家」です。島内の散策もすばらしいことでしたが割愛しました。本多静雄氏のお話では洛友会会員の七日島での一泊は無料にしていただけのようです。ご希望の方は洛友会中部支部へ申し出て下さい。お世話いたします。

一同に会しました。現在洛友会支部会員は総勢十六名ですので大半の出席を得て盛大にとり行なわれた次第です。

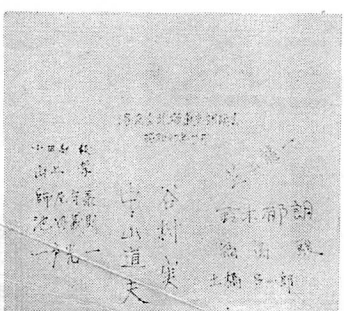
経過報告、会計報告につづき支部長には山上孝先生、副支部長には師尾守泰先輩にお忙しい所を引き続きやっていただくことをお願いして議事を済ませ、歓談に入りました。まず形通り自己紹介に始まり小田部大先輩から北海道の電気事業の変遷について詳しくお話を受け一同深い感銘をうけて拝聴しました。その他師尾先輩のヨーロッパ旅行のみやげ話など、始めて顔を合わせた人の多いにもかかわらず打ちとけたなごやかな雰囲気の中に三時間ほど過ぎ、ホテル中庭にて記念撮影をして散会しました。(土橋記34電気)

北海道支部総会報告

昭和四十七年度の北海道支部総会は、二年ぶりに七月九日札幌パークホテルにて催されました。この日は北海道らしいすがすがしい快晴に恵まれ、小田部、山上兩大先輩の御出席をいただき十一名が

北海道支部総会報告

昭和四十七年度の北海道支部総会は、二年ぶりに七月九日札幌パークホテルにて催されました。この日は北海道らしいすがすがしい快晴に恵まれ、小田部、山上兩大先輩の御出席をいただき十一名が



送 送

昭十会クラス会報告

昭和四十五年卒業三十五周年記念同窓会を京都木屋町の幾松で開いてから、次の四十年間までの五年間を待ちかねて関西の有志が発起し、入学四十周年記念と銘を打って臨時のクラス会を昭和四十七年十月八日に京都市東山区の吉水庵で催しました。

出席者は左記の十九名で、出席率は前回より少し悪かったが、それでも二年ぶりの再会を楽しみむ者や、卒業以来の初顔合せもあったりして久々の逢瀬に学生時代の昔をしのびながら、還暦を過ぎたお互いの健康を喜び合いました。

また、卒業四十周年記念の会は昭和五十年に母校のある京都で開くことと、それまでに一度東京方面で臨時のクラス会を開くことを約して愉快な会合を終りました。

なお、翌九日には十一名が京都東カントリーでゴルフの東西合同コンペを楽しみました。

出席者、天野、井上、植田、梅本香山、神谷、北村、城戸、黒田治塩沢、清水、染田、高木、殿井、中沼、中堀、林、藤本、和田。

(中沼)

らっきょうつ会合

(昭和8~11卒在京者)

第7回会合が8月17日東京南青

山NHK青山荘において開催されました。在京総数47名中26名の出席を得て、第一回発会日の出席者24名を上まわる今までにない出席率でした。いつもの常連約20名のほか今回初出席の和気幸太郎氏を得て、皆元氣一ぱい懐旧談に。近況に話はずみませんでした。

昭和三十二年十五周年同窓会

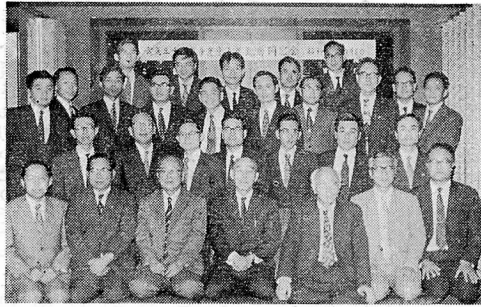
去る十月八日、昭和三十二年卒業生の卒業十五周年を記念した同窓会が開かれましたので、簡単に報告いたしたいと存じます。

平家ブームに混雑する京都は祇園の近くの新ハムムラにて、年をとるをお忘れになったかのような松田先生、盲腸の手術をされた直後なのにかえってお元氣に見える林(重憲)先生、電気系教室からは前田先生、近藤先生をお迎えし、京都からの距離によって会費を変えよとの幹事の細かい配慮などによってか、遠方からの参加者も多く盛大な同窓会でした。

卒業後十五年といえは働き盛り、縦横に御活躍の方はかりで、各自の近況報告も仕事の話が中心

で、なかには猛烈な売り込み宣伝まで入って、笑いの渦の中にもなかなかの厳しさが感ぜられ、昭和三十三年から今日までの電気工学関係インダストリーの発展状況を数時間に聞く思いがしました。

(小沢孝夫 記)



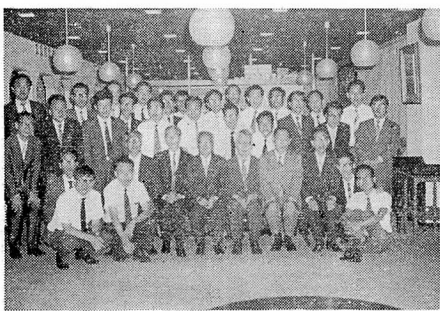
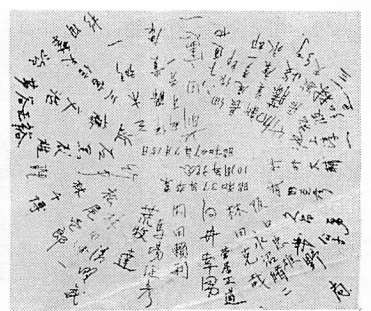
昭和37年卒10周年同窓会

台風の影響か、かなり激しい雨の降る七月十五日(土)午後、京都は東山、美術館のそばの関電京都会館に集う仲間29名。昭和37年に電気・電子工学教室を卒業した同窓生の卒業10周年記念パーティ

が行なわれた。この同窓会は、関西で三回、関東で一回と別々に開かれていたが、一同に会するのははじめてとあって東京方面から14名がかけつけた。教室から前田、林(千)、清野、近藤、池上、阪口諸先生に臨席いただき、久方振りの再会を楽しみ教室の現況を伺った。

新婚間もない久留氏(東芝)が紅一点の美人奥さんを連れて出席会を一段と華やかにしてくれたことは特筆すべきであろう。在学中学生実験のために撮った学生服姿の写真を懐しみ、参加者全員の近況を話しているうち四時間はあつという間に過ぎた。先生御退席の後林田(関電)、伊藤(三菱)両氏が海外出張で写した比較的テクニカルなスライドを披露した。翌日は祇園祭の宵山とあって、その夜は京都や友人宅に泊る人もいてつきぬ名残りを惜しんだ。

なお今回の世話は林田、浅野、松本(関電)氏が関西側の中心となり、東京側は向井、加藤(東芝)氏がまとめて下さった。次回は五年後、幹事は住友電工さん。(松波・三宮記)



編集後記

○本年も感々師走の月を迎え、皆様御多忙のことと存じます。今月は本会報と共に昭和四十八年度の名簿を送る予定です。

○各支部の編集委員の方々に、原稿を御願ひしてありますが、会員各位より積極的な御投稿を御願ひします。専門の電気に関係無く自由に随想をお寄せ下さい。では、よい年を御迎え下さい。(幹事 山本記)